

SID

SOCIETY FOR INFORMATION DISPLAY

ニュースレター

日本支部

(第13号)

発行元：SID日本支部

発行責任者：前田 誠

発行日：1999年9月15日

日本支部近況

SID日本支部長 前田 誠（ソニー）

5月のシンポジウムSID '99がSan Joseで行われ盛況のうちに終わりました。別項の報告をお読みください。今回のシンポジウムの登録に際しては会員であるにもかかわらず「あなたの会員登録は期限切れになっています」などと本部からの知らせが来た人が数少なからずありご迷惑をかけ申し訳ありませんでした。現在SID本部では各種データを電算化し処理を迅速にするべく改革中です。この改革の最中に起こった出来事です。来年は改善されたシステムになるので今年と同じご迷惑はおかけしなくなるはずです。



M. Maeda

5月のシンポジウムでは今年も大勢の日本の会員がさまざまの賞を受けました。受賞者の声の欄をお読みください。日本がDisplay技術をリードしている証左だと思います。

また先日行われた皆様の投票の結果SID本部役員のうちアジア地区Vice presidentに岩本明人氏、日本Directorに御子柴茂生先生が就任されました。

次は12月1-3日の仙台国際センターでの第6回ディスプレイ国際ワークショップIDW '99が控えています。電通大の御子柴先生を組織委員長として準備が着々と進んでいます。多くの論文がよせられて来ています。このIDWは日本支部が他の学会と共催してきました。SID本部では盛大になってきたこのワークショップをSIDの主要なコンファレンスと認めSID国際会議として扱うことに決めました。今後ますます世界中のDisplayの技術者科学者の注目を集めるでしょう。

また2001年にはAsia Displayがまた日本に戻ってきます。10月に名古屋で開催されます。日本支部は現在600人を超える会員にまで成長しました。皆様の積極的な学会への貢献がここに現れていると思います。

SID日本支部Directorに就任して

御子柴 茂生（電気通信大学）

この度図らずも、SID日本支部Directorの大任を仰せ付けられました。その重責をひしと感じております。日本支部長は日本支部で選出される支部側の代表であるのに対し、日本支部Directorは本部側から選出される役員です。年3回開催されるBoard of Directors Meetingなどで決定される本部方針を支部に持ち帰り、支部意見を本部に伝え、また本部と支部との意見調整役となります。日本支部長に協力して支部活動の活性化をするのもDirectorの役目です。



S. Mikoshiba

そもそもこの役は、本部の設置されている米国と、日本など米国以外の国との人や情報の往来が未だ十分でなかったところ設けられた役職です。したがって当時日本支部Directorは米国駐在の方にお願ひし、本部と日本支部との架け橋としてご活躍戴きました。しかし近年、手軽に海外出張ができるようになり、また事務的な情報交換も電子メールにより本部と支部の担当者同志で直接可能となりました。従って、以前のDirectorの仕事は次第に不要となって

きました。

その代わり、時代の流れと共に新しい役割が生まれました。ディスプレイビジネスにおいて日本が世界をリードする立場になったからです。日本の優れた技術はタイミングを失うことなく、世界に発信されなければなりません。また、従来米国に頼り過ぎていたディスプレイ関連の国際会議開催の一端を担うという義務を果たすことも必要です。このため、SID本部と日本支部との学会運営調整役が必要となってきました。たとえば毎年日本で開催されるInternational Display Workshopsの長期的開催計画や、これに対するSID本部との協力体勢調整などです。IDRC、ASIDとの協調関係の方向付けもあります。このような面から、電子産業界において半導体に次ぐ巨大ビジネスとして成長しつつあるディスプレイを世界に羽ばたかせ、またグローバル化を推進する一助となることができれば、と願っております。

こう書いておりますと、まるで自分が今後何をするべきかについて、自分のために考えを整理しているようになってしまいました。今後微力ながらも全力を尽くして参りますので、御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

SID '99概要紹介と蛇足の一言

苗村 省平 (メルクジャパン)

SID '99が5月16-21日の会期中で、アメリカのSan Joseで開催されました。一口でSID '99といっても、行事内容は実に多彩です。

中核をなすTechnical Symposiumは18-20日の3日間ですが、16日には、ディスプレイの基礎講座ともいふべき4つのShort Courseがあり、17日と21日にはあわせて16の主題に関するSeminarが開かれています。18



S.Naemura

-20日にも、Technical Symposiumが始まる前の朝7時半から9時までの時間帯に、あわせて6件のApplications Seminarが組まれました。18日には、夜の8時から10時の時間帯に、2件のEvening Panelsがありました。製品や開発品の展示関連では、通常のExhibitionに加えて、昨年に引き続いてのDisplay Technology Showcaseも併設されました。これらすべての行事をあわせると、参加登録者は6500人にのぼります。そのうち、Technical Symposiumの参加登録者は、1800名程度です。

Technical Symposiumの内容を少しばかり、紹介しましょう。今回のKeynoteはElectronic Cinemaを主題とした2件の講演で構成され、ILA (Image Light Amplifier) 技術を用いた液晶ライトバルブ方式のプロジェクターと、微小アルミミラーの変位で画像を投影するDLP (Digital Light Processing) 技術による、同じフィルムの共演を楽しませてくれました。

(一編の映画を意味するfilmという言葉は、将来、語源の説明が必要になるかもしれません。)

Keynoteの後は、5会場に別れての講演です。口頭発表は50のセッションで行われ、ポスター発表とあわせた総数は270件にのぼりました。発表者は18の国・地域にわたりますが、アメリカと日本で約3分の1ずつ、これに韓国を加えると、全体の4分の3を占めます。ディスプレイデバイスで見ますと、液晶が120件程度で半数近くを占め、CRT、PDP、EL、そしてFEDがそれぞれ30件から10数件程度で続きます。個々のデバイスおよび関連技術の動向や、注目される発表などは、日本支部が共催した報告会(7月2日)などで専門の方々から報告されており、資料も配布されていますので、ここでは割愛します。

このように、SID Technical Symposiumでは日本からの発表が質・量的にも最大の貢献をしています、発表の機会が与えられなかった優秀な仕事が、他にない訳ではありません。それは、仕事の内容が発表に値しないというからではなく、審査の段階で内容を正確にアピールする情報に欠けていたことによる場合が少なくありません。これは、投稿者のみならず、Symposiumの参加者やSIDにとっても残念なことです。

プログラム委員会の論文採択会議において、採否を決める

にあたって議論されることは、一にも二にも新規性・独創性の有無です。その情報源は、既発表の論文と、投稿されたTechnical Summaryだけです。投稿者の中には、仕事の結果が今までにない新しいものを生み出したのであれば、「内容は当日発表する」でよいのでは、と考える方がいらっしゃるかも知れません。しかし、審査委員の多くに、投稿者の仕事の新規性・独創性を認めてもらうためには、技術的、科学的な内容が具体的にTechnical Summaryに記載されていなければなりません。書かれていない事を審査委員の誰かが説明しても、あるいはSymposiumの当日には話されるはずだ、と言っても通りません。Technical Summaryに書いてあることがすべてなのです。これは、投稿者や所属機関の知名度などに影響されずに、公平な審査をするための大原則です。公平さという点では、委員の所属機関からの論文が審査される際には、その委員は退席します。委員が著者として名前を連ねているから、あるいは同じ機関からの投稿だからといって、何ら優遇されることはありません。

日本支部では、Asian Program Sub-Committeeを積極的に運営し、上述の本審査に先立って、アジアから投稿された論文に目を通しています。上述のような観点から、いわゆる、論文のbrush upのお手伝いをする訳ですが、現実には時間的、物理的な理由で、本審査までに有効に作用させるのは困難な場合が殆どです。やはり、せつかくの優れた仕事が正當に評価されて、発表の機会が与えられるようにするためには、期限内に提出するTechnical Summaryに“What's new”を具体的に記述することが重要です。

Call for Papersには、Format of Submissionsとして、ResultsやImpactを記載するように促しています。“Results”は“describe, in detail, the specific results”のように説明されますが、これは結果だけではなく、how(どのようにしてその結果を得たのか)を、科学的、技術的に明確に説明しなさい、という意味だと思います。また、“Impact”は“discuss the significance of your work, and compare your findings with previously published work”であって、単純に、その仕事は何に役立つかという意味でのインパクトではないのです。

日本支部の方々からの優秀な論文発表が益々増加し、ディスプレイ産業のみならず、ディスプレイの科学・技術においても、より一層の日本のリーダーシップが発揮されるように期待し、日本支部も様々な形でその支援ができれば、と考えております。ちなみに、SID 2000は来年5月14-19日にLong Beachで開催され、Technical Summaryの投稿期限は本年の12月1日です。IDW '99(12月1-3日)に出かける前の一仕事、さあ、準備を始めてください。

1999年度SID受賞者の声



M. Maeda

Fellow of the SID 前田 誠 (ソニー)

For key contributions to the development of the Trinitron™ and monochrome flat CRTs.

このたびSID Fellowとなりました。私としては望外のことです。学校をでて30年を越す期間の殆どの期間CRTに携わってきました。最近のフラットパネルの躍進の中にあつてCRTが肩身の狭い思いをしています。CRT従事者にFellowを認めていただきCRTはまだ元気に進展しているのだと認めていただけたものと思っています。より美しい画像をより安価に提供できるよう今後も微力ながら努力する所存でございます。



S. Matsumoto

Fellow of the SID 松本 正一 (液晶技術情報研究所)

For contributions to the research and development of passive and active LCDs, and for his leadership in the LCD community.

東芝での1968~1991までの23年間、続いてホシデンでの1998までの7年間の30年の長期間に亘り、幸運にも一貫してLCDの研究開発に全力投球できました。この謂わばライフワークの液晶経験を広く還元するための「液晶技術情報研究所」を開設した矢先に、良いタイミングでディスプレイの最高賞を頂戴し感激しております。この受賞を契機として、液晶社会の発展にさらに微力を尽くしたいと思っている昨今です。



T. Shinoda

Fellow of the SID 篠田 傳 (富士通研究所)

For the development and commercialization of color plasma display technologies.

フェローを受賞し、これまでカラーPDPの開発に協力頂いた方、受賞に尽力頂いた方に感謝致します。例えば1979年に対角10cmの試作パネルに3原色の「愛」の文字を表示してから21型、42型の製品化迄、多くの困難が有りました。しかし、PDPは開発当初には考えられない素敵な世界に連れ込んでくれました。更に、夢と感動を運ぶ大画面TVとして大きく育って欲しいと思います。



Y. Gotoh

Special Recognition Award 後藤 泰行 (チッソ)

For the development of a new class of fluorinated liquid-crystal compounds suitable for TFT-LCDs.

今回、「TFT-LCD用のフッ素系液晶材料開発」というタイトルで特別賞を頂きました。思いおこせば、最初にフッ素系液晶の合成を手がけましたのが1980年ですから、約20年にもなります。開発当初は正確な物性が認識されておらず、今日の様に多方面に使用される様になるとは全く思ってもみませんでした。恩師の杉森教授(富山高専)と今回の喜びを分かち合いたいと思います。今後も「大きな異方性と低粘性」をキーワードに材料開発に努力するつもりです。

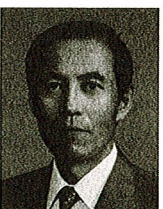


K. Okamoto

Special Recognition Award 岡元 謙次 (富士通)

For the development of novel and innovative multi-domain vertical-alignment processes for large-screen fast LCD applications.

大変名誉な賞を頂き、御推薦頂いたSID日本支部の先生方、また開発から量産に係わった優秀なエンジニアに深謝いたします。全く新しい原理のLCDを開発から量産まで非常に短期間で実現できたのもひとえに新技術実用化に対するエンジニアの情熱と執念がなせる技だったと思います。MVA技術の高いポテンシャルを最大限に引き出すため今後も微力を尽くす所存です。ありがとうございました。



K. Suzuki

Special Recognition Award 鈴木 幸治 (東芝)

For the development of novel large-area TFT-LCD array structures and drive systems.

今回名誉あるSIDのSpecial Recognition Awardを受賞でき大変嬉しく思っております。受賞はアモルファスシリコンおよび低温ポリシリコンTFTを用いた大型液晶ディスプレイに関する研究開発です。本研究は'80年以来19年間続けてきました。受賞にあたり研究開発を共にした東芝社内の諸先輩、同僚そして後輩など関係者各位そして、SID日本支部や関係学会の先輩諸氏のご支援に改めて感謝いたします。



Y. Takeuchi

Special Recognition Award 竹内 安正 (JSR)

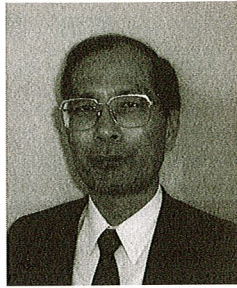
For the development of low-temperature alignment materials for TFT-LCD applications.

この度、SID日本支部の皆様のご推薦により名誉ある賞を戴き、皆様に心から感謝致します。今回、TFT用配向膜の役割を認めて戴き、材料メーカーとして、大変光栄に存じております。今後、液晶産業はあらゆる業界のコラボレーションで発展していく事でしょう。今回の受賞がデバイスメーカー以外の研究者の道標になる事を期待します。

アジア地区担当副会長に就任して

岩本 明人 (東芝)

SIDでは、ディスプレイ技術を世界規模で活性化する方策として、地球を3 (アジア, ヨーロッパ, アメリカ) regionsに分け、各regionの活動は担当 Vice President (VP) の元で、region毎の特性を活かした活発な学会活動が行えるシステムを7年前から採用してきました。



A. Iwamoto

アジアregion担当VPとして98年は、Prof. Choo Chon Lee (KAIST) が就か

れていましたが、健康上の理由から任期半ばで御勇退し、筆者が五代目として、この5月から世紀末の2年間を受け持つ事になりました。

前任VPの方々は、ディスプレイ研究上に多くの功績を残すと共に、SID学会運営・発展にも手腕を発揮されました初代VPの小林先生 (山口東京理科大)、後任の鈴木さん (インターフェース社)、第三代内池先生 (佐賀大学) までの草創期6年間は日本支部から輩出し、VP制度の確立や新支部設立等アジアregionとしてのSID活動の活性化に貢献され、今日の繁栄の基礎を築かれました。これらの貴重な成果・良き伝統の上に、皆様のご協力を得てこの重責を任期まで果たしたいと思います。

さて、この場を借りて当方の目標の一端を記し、ご協力を仰ぎたいと思います：

“アジアとしての皮相的な壁は取り除こう”

SIDの本部主催会議に出席していますと、時折「アジアregionは欧米とcultureが違う」と謂われる事が有ります。欧米の人々にとって見ると、“なにやら解らぬ言葉を話しながら、自分たちの出来なかった／出来ない事をやり遂げる人々／国々の集まりで、我々とは違うのだ。”と映るのかも知れません。デジタル社会のインフラとなるディスプレイ (液晶, PDP等) 技術・商品をアジアregion各支部が先導開発したのは、“奇跡の経済発展”の技術版であり、それは“cultureが違うから達成できたのだ”と短絡的に考えるのでしょうか。しかし、これは我々各人の努力の結果・賜物だと考えます。

個々の事例を仔細に見てみますと、行動を決定する“考え方”は洋の東西に拘わらず同じように感じます。“culture”のような大きな言葉で一律に気軽に全てを片付けられては困ります。この一知半解の元は今まで我々からの情報発信が少なかったからでは無いでしょうか。私は、任期中の目標として、region内での各支部活動の活性化を図るだけでなく、その成果を積極的に世界に発信・啓蒙し、外からの／内からの皮相的な壁を取り除く事、つまり“region内外の調和ある発展”、“技術として世界は一つ”を実現して行きたいと考えております。

繰り返しになりますが、この目標達成にはアジアregion最大の日本支部皆様のご協力が不可欠です。是非、来るべき21世紀には開かれたアジアを技術面から達成したいと思います。

高臨場感ディスプレイフォーラムご案内

本フォーラムは、従来より格段に高い臨場感、新しいインパクト映像表現の実現が期待される高臨場感表示に関するディスプレイ技術 (HMD、立体視表示、超広画角高精細表示など)、応用システム、映像コンテンツなどの最先端動向・展開を、実用化・産業的発展課題の視点も含めて提唱・議論する場を提供することを目的としています。

日 時：11月17日 (水)、 9:30~17:30
会 場：東京都、東京工業大学 (大岡山)、百年記念館 3F・フェライト記念会議室東急目蒲線／大井町線、大岡山駅前
展示実演コーナー併設
参 加 費：無料 (資料代は千円位)
終了後懇親会予定 (会費2000円位)
ホームページ：<http://www.ite.or.jp/study/annai.html>
主 催：映像情報メディア学会・映像表現研究委員会 (主査：佐藤甲斐)、映像情報メディア学会・情報ディスプレイ研究委員会 (主査：村上宏)、画像電子学会 (会長：塚田啓一)、三次元映像のフォーラム (代表：奥山文雄)
問合せ先 (代表幹事)：
谷 千東 (NEC) TEL 044-856-2112
E-mail: tani@rdg.cl.nec.co.jp

SID日本支部会員関連行事予定

1999年
9月6日～9日 IDRC '99, ベルリン
9月29日～10月1日 液晶学会討論会, 富山大
10月8日 IDW '99 Late-News Paper 〆切
10月21日～22日 映像入出力合同会議, 愛媛大
10月21日～22日 Multispectral Imaging & Color国際会議, 千葉大
11月5日 IDRC '99 報告会, 東京
11月17日 高臨場感ディスプレイフォーラム, 東工大
12月1日～3日 IDW '99, 仙台国際会議場
12月 SID日本支部総会、評議委員会, 東京
2000年
1月27日～28日 発光型・非発光型ディスプレイ合同研究会 富山国際会議場

発光型／非発光型ディスプレイ合同研究会 講演募集

募集テーマ：

発光型ディスプレイデバイス、非発光型ディスプレイデバイス、およびディスプレイデバイス一般 (材料・応用技術等も含む)

日 時：2000年1月27日 (木)・28日 (金) (2日間)
場 所：富山国際会議場 一 大手町フォーラムー (富山県富山市)
講演方式：発表概要紹介 (口頭発表10分) 付きポスター講演。
口頭発表の時間は変更の可能性があります。
講演申込締切日：
1999年11月8日 (月)
申込方法：講演タイトル、報告者 (連名者含む、登壇者に〇)、所属、連絡先 (住所、E-mail, TEL, FAX) を、E-mail (またはFAX) にて下記宛てにお送りください。
申込み/問合せ先：
電子ディスプレイ研究会 幹事 佐々木 進
(株) 日立製作所 ディスプレイグループ
画像開発センタ (中研在勤)
E-mail: sasaki-s@crl.hitachi.co.jp
F A X : 042-327-7763 / TEL: 042-323-1111 内2843
共 催：映像情報メディア学会 情報ディスプレイ研究委員会
照明学会 光関連材料デバイス研究専門部会
SID日本支部
電気学会 電子デバイス技術委員会
電子情報通信学会 電子ディスプレイ研究会